

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12450

研究課題名（和文）独語圏の観光事業に見る「ベートーヴェン・イベント」の沿革に関する文化史的研究

研究課題名（英文）Cultural-historical research on the history of "Beethoven Events" appeared in tourism businesses of German-speaking areas

研究代表者

小宮 正安（Komiya, Masayasu）

横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・教授

研究者番号：80396548

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀半ば以降ドイツ語圏の統一が進められる過程で、ドイツ文化の象徴と目されるようになった典型がベートーヴェンである。しかも当時のドイツ語圏においては観光産業が勃興を遂げる中、ベートーヴェン関連の催しが現代にいたるまで頻繁におこなわれ、特に誕生の地ボンや活躍の地ウィーンでは「ベートーヴェン・イベント」とも呼べる現象がしばしば見られる。本研究では、観光産業と協働しつつ、ドイツ語圏で展開されてきたベートーヴェン関係の催し物の沿革を文化史の側面から検証し、そこから演繹されるベートーヴェン受容のあり方やドイツイメージの変遷、さらにコロナ禍の克服を模索する我が国のツーリズムへの応用可能性を探った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

観光産業の発展と結びついたベートーヴェン関連のイベントは19世紀後半以降、度々催されてきた。しかもその動きは、各時代の政治社会状況や、その影響を受けた文化政策の変化を反映させながら、今日に至るまで続いている。

ただしベートーヴェン研究自体は数多く行われているにもかかわらず、ベートーヴェンを観光と関連付け、その受容のあり方を追ったものはほとんど存在しない。本研究はこうした状況を念頭に、既存の諸研究を踏まえつつも、それらが見過ごしてきたテーマの上に、ドイツ語圏の観光史、及び観光と相互に関連し合うベートーヴェン・イベントの諸相について新たな視座を打ち立てることができた。

研究成果の概要（英文）：In the German-speaking world from the mid-19th century, Beethoven came to be seen as a symbol of German culture, which helped the unifying German countries. Moreover, as the tourism industry was booming in German-speaking area at the time, "Beethoven events" were frequently organized until this day, especially in Bonn, where he was born, and Vienna, where he was active. In this study, in collaboration with the tourism industry, I examined the history of Beethoven-related events that have been held in German-speaking area from the perspective of cultural history, and from this I proofed how Beethoven was received and the changes in the image of Germany. Furthermore, I explored the possibility of application to tourism in Japan, which is seeking ways to overcome the coronavirus pandemic.

研究分野：総合人文社会

キーワード：観光学 文化史 社会史 芸術史 音楽史 地域研究 観光史

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ベートーヴェン研究そのものは、音楽学や美学の分野からものをはじめ夥しい数にのぼる。また近年では、例えば死後のイメージ形成をめぐる受容史といったテーマについても、音楽芸術史研究者のヘルムート・ロースをはじめとして、政治学や社会学とも連動した幅広い視座を交えた研究がおこなわれるようになってきている。

にもかかわらず、従来のベートーヴェン研究に関しては、観光という視座が抜け落ちているという状況が明らかなのもたしかであった。つまり、ベートーヴェン(厳密に言えばベートーヴェン受容)と観光の関わり、さらにはその典型的な発露ともいえるベートーヴェン・イベントの歴史を包括的に捉えた研究は存在しない。観光と何らかの形で関わるものを挙げるとすると、特定の地域や時代を区切ってベートーヴェン・イベントを取り上げた研究こそ存在するが、それらはいずれも狭い視点からのアプローチにとどまっており、また研究の件数そのものがきわめて少なかった。

本研究はこうした状況を踏まえ、既存の諸研究を踏まえつつも、それらが見過ごしてきたテーマを、申請者のこれまでの研究方法を援用しながら展開した。

2. 研究の目的

19世紀半ばには、リヒャルト・ワーグナーが執筆した小説『ベートーヴェン巡礼』を読んだインテリ市民層の間では、「聖地巡礼」的な性格の旅行が活発化した。またこうした出来事を契機に、ベートーヴェンをテーマとした観光旅行そのものが、数々のベートーヴェン・イベントと連動して、19世紀後半には一般にも広がっていった。

本研究ではこのような沿革を踏まえ、ドイツ語圏の各時代における政治的イデオロギーや、そこから派生する文化政策を宿したベートーヴェン受容と観光の密接な関係、またその発露としての「ベートーヴェン・イベント」の存在意義に着目した。ドイツやオーストリアといった世界有数の観光立国を擁するドイツ語圏で、「ベートーヴェン」を前面に掲げたイベント戦略が打ち出されてきた背景を多角的に捉える作業を通じ、現代にまで至るドイツ語圏における文化の諸相と変遷を明らかにすること。またそうした作業を通じ、それはコロナ禍に見舞われた我が国においても、未来投資戦略2018年に基づきつつ、国内外へ新たな形で文化的観光資源を発信しようとする動きに示唆を与えることを目的とした。

3. 研究の方法

時代的には「ベートーヴェン・イベント」が始まった19世紀半ばから、現代までを扱った。この間ドイツ語圏は、ドイツ連邦、帝政、共和制、ナチス独裁、四カ国支配、東西分裂(オーストリアは中立国化)、再統一という様々な政治形態の中に置かれてきたが、時代毎にドイツ語圏がみずからの文化的アイデンティティ確立のためにベートーヴェンを中心に据えてきた軌跡、並びにその一環として「ベートーヴェン・イベント」を催した社会的・文化的背景を探った。

方法としては、国内外の諸機関における調査・収集を主とした。特に、ベートーヴェン関係の資料を数多く有し、ウェブ上での資料公開を開始しているウィーン楽友協会資料館やボン・ベートーヴェン資料館等を利用し、オットー・ビーバ、イングリード・フックスのアドバイスを受けた。またコロナ禍におけるベートーヴェン・イベントの取り組みに関しては、ドイツ観光局やオーストリア観光局における調査、さらには福井県立音楽堂や宇治文化会館における聞き取り調査を実施した。

4．研究成果

2021 年度は研究遂行にあたり、まずは音楽学や美学、史学、観光学といった学問領域を結び付ける学際的な視の吟味をおこなった。さらに、観光産業に不可欠とされる AIDMA の法則がベートーヴェン・イベントに現れているという仮定に基づき、パンフレットや土産物等、既存の学問領域では掘り上げにくい対象を有効に扱いつつ、既存の学問領域を複合横断的に捉える文化史的アプローチの基礎固めをおこなった。

これらの視点から、ドイツ語圏がヨーロッパ有数の観光地並びに観光立国を擁するにあたり、「ベートーヴェン・イベント」がいかなる役割を果たしたか、そこから演繹される音楽家の受容と密接に関わる観光イベントにおける、イメージの確立の方法と可能性、ドイツ語圏の文化遺産とそれにまつわるイメージに関する観光事業の役割と影響力、といった、相互に関わりあうメカニズムの解明に向け、トピックの選定をおこないつつ、資料収集と考察を展開した。

2022 年度は、19 世紀半ばから今日に至る「ベートーヴェン・イベント」の歴史を俯瞰し、文化史的にいかなる分析方法が可能であるのかについて、「ベートーヴェン・イベント」の歴史的一次資料の収集を通じ、ドイツ語圏がヨーロッパ有数の観光地並びに観光立国を擁するにあたり、「ベートーヴェン・イベント」がいかなる役割を果たしたかについての再検討をおこなった。結果、ドイツ語圏における「ベートーヴェン・イベント」の展開を具体的な柱としながら、観光政策を通じて浮かび上がるベートーヴェン・イメージの受容と、ドイツ語圏の文化イメージの相関関係について詳細な分析を実施できた。とりわけ 1870 年のベートーヴェン生誕 100 年祭にあたっては、ウィーンやベルリンといったドイツ語圏の大都市のみならず、地方都市においても、時に街の規模を上回るような内容のベートーヴェン祭が、しかも観光を視野に入れながら展開されたことを明らかにできた。

2023 年度は、「音楽家の受容と密接に関わる観光イベントにおける、イメージの確立の方法と可能性」「ドイツ語圏の文化遺産とそれにまつわるイメージに関する観光事業の役割と影響力」をさらに掘り下げると同時に、この 2 つのトピックを、「日本において『ベートーヴェン・イベント』がいかなる形で受け入れられてきたかという」受容史の側面についても詳細な分析を進め、「そのメカニズムを構成する要素がコロナ禍によってどのように制限されたのか、一方そのような制限下で『テクノロジー』の応用によってどのような対応が可能か」というトピックに収斂させるさせた。

これらの研究成果は、研究期間内に発表した論文や講演等で明らかにするとともに、2024 年に刊行予定の研究書において詳細な発表を行う予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小宮正安	4. 巻 61(2)
2. 論文標題 特集：音楽の季節の復活に向けて～「オーストリアの現在（いま）」を映したウィーンフィル・ニューイヤーコンサート2022年	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 音楽の世界	6. 最初と最後の頁 2-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮正安	4. 巻 61(3)
2. 論文標題 この夏に想う～今、特に気になること（1）「ウィーンで見たウクライナの「過去」と「今」」を映したウィーンフィル・ニューイヤーコンサート2022年	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 音楽の世界	6. 最初と最後の頁 2-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮正安	4. 巻 305
2. 論文標題 ブルックナー 交響曲第4番と第7番の成功の裏側 ～その歴史的背景とともに～	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 モーストリークラシック	6. 最初と最後の頁 38-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮正安	4. 巻 307
2. 論文標題 第九が生み出された時代状況とは？	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 モーストリークラシック	6. 最初と最後の頁 16-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮正安	4. 巻 71(2)
2. 論文標題 生誕200年フランクとフランスの交響曲 社会史から考えるフランスとドイツの交響曲	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 レコード芸術	6. 最初と最後の頁 44-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮正安	4. 巻 289
2. 論文標題 ウィーンの作曲家 ベートーヴェンとシューベルト 生き辛い保守反動の世に晩年を送った2作曲家	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 モーストリークラシック	6. 最初と最後の頁 70-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮正安	4. 巻 291
2. 論文標題 19世紀以降のドイツ語圏 オーケストラの変遷	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 モーストリークラシック	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮正安	4. 巻 70-7
2. 論文標題 コンセプト・アルバムの世界 ヨーロッパと非ヨーロッパの出会い	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 レコード芸術	6. 最初と最後の頁 42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮正安	4. 巻 60-4
2. 論文標題 スポーツ、文化、社会について改めて考える～東京夏期オリンピック・パラリンピックを終えて～ 「感動の時代」を問う	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音楽の世界	6. 最初と最後の頁 2-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮正安	4. 巻 296
2. 論文標題 ベートーヴェンの交響曲 背後に息づく「英雄」の形姿 オリーブ山上のキリストとプロメテウスの創造物	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 モーストリークラシック	6. 最初と最後の頁 36-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮正安	4. 巻 63
2. 論文標題 ウィーン音楽界におけるウクライナ情勢の「現在(いま)」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 音楽の世界	6. 最初と最後の頁 34-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮正安	4. 巻 0
2. 論文標題 社会文化史から辿るボヘミア音楽の歩み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 第43回草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバルプログラム冊子	6. 最初と最後の頁 70-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮正安	4. 巻 0
2. 論文標題 《第九》への道－《第九》からの道	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東京春音楽祭2024 プログラム 冊子	6. 最初と最後の頁 102-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小宮正安	4. 発行年 2023年
2. 出版社 創元社	5. 総ページ数 280
3. 書名 エリザベートと黄昏のハプスブルク帝国	

1. 著者名 Masayasu Komiya	4. 発行年 2023年
2. 出版社 LIT Verlag	5. 総ページ数 236
3. 書名 How Pandemics Shape the Metropolitan Space	

1. 著者名 小宮正安	4. 発行年 2024年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 96
3. 書名 もったきわめる！ 1曲1冊シリーズ リヒャルト・シュトラウス：《ばらの騎士》	

〔産業財産権〕

〔その他〕

東京春音楽祭2024のマラソンコンサート『《第九》への道ー《第九》からの道』 2024年3月23日 於：東京文化会館小ホール)の、企画構成解説をおこない、同時に曲目解説や歌詞対訳をおこなった。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------